

中部の

エネルギーを 築いた

人々

貧苦から身を起こし福沢桃介の
電力事業を引継いだ 増田次郎

静岡県志太郡西益津村(現在の藤枝市)に生まれた増田次郎は、家が貧しく幼少から苦勞を重ねたが、至誠一貫、業務に精勵し、後に後藤新平、福沢桃介に認められ、大同電力社長、日本発送電総裁、台湾電力社長等を歴任した立志伝中の人物である。



増田次郎

生い立ち

増田次郎は明治元年2月、増田儀右衛門の次男として生まれた。父が事業に失敗し家屋敷も人手に渡った。小学校卒業後、親類筋の茶商浜田家の奉公に出され、16歳から実家に戻って農耕に従事し、かたわら夜は学業に励んだ。20歳で上京、東京英和学校に入学したが、1年後、父の病気で郷里に戻り、静岡で印刷業、伊豆松崎村の小料理屋を手伝ったりした。松崎村長福本七五三の推薦で学校組合書記の職を得、次いで加茂郡役所傭、駿東郡役場書記となった。駿東郡郡長岡本武輝の目に止まり、普通文官試験を受験するよう薦められた。独



後藤新平

学自習、明治31年3月、見事に合格し、新しい人生が開けた。薦められて台湾総督府樟脳局囑託となったが、その仕事振りは民政長官後藤新平の識るところとなり、明治38年後藤の秘書に抜擢され、明治40年後藤が南満州鉄道総裁に転じると秘書官として従い、さらに41年鉄道院総裁になった時も秘書官として仕え、官界での後藤側近として知られた。桂内閣の総辞職で後藤が下野すると、増田も明治45年1月に官を辞し、後藤とともに立憲同志会に加わり、大正4年4月から2年、静岡県選出の代議士となった。

木曾川開発と大阪送電

このころ、名古屋電灯社長福沢桃介は木曾川開発のため、後藤に支援を求めてきた。通信大臣時代、水力開発を主唱した後藤は快諾し、協力者として増田を推薦した。以降増田は福沢を支えて木曾電気製鉄設立から大同電力への事業展開に貢献した。増田の仕事は、第1に木曾川水利権増量のため、木曾川上流

に広大な御料林を有する帝室林野管理局との交渉であった。発電所建設は、従来の運材(川狩り)を困難にし、水利権許可の最大の障害となっていた。中央線



福沢桃介

が開通し、帝室林野管理局は近代的運材法として森林鉄道を検討していた。増田は、川降りから森林鉄道方式への転換に木曾電気製鉄が協力(無償譲渡)することで話をまとめた。

また、大阪送電に向けて大阪電灯や宇治川電気との交渉を行い、これが行き詰まると、福沢とともに京阪電鉄と交渉を進め、大阪送電株式会社を創設した。増田は福沢の片腕となって活躍し、木曾電気製鉄常務、大阪送電常務、そして大正10年2月設立の大同電力の常務・副社長となった。



森林鉄道の運材

大同電力社長・日本発送電総裁

昭和3年6月、福沢桃介が大同電力社長を辞任する際、副社長の増田を後任社長に指名した。増田への引き継ぎにあたり、福沢は守成の難しさを告げた

が、実際その予言は的中した。増田が社長に就いたころは、欧州大戦後の不況下にあり、過剰設備を抱えて業績は暗雲低迷、増田は資金調達や需要開拓に駆けずり回った。満州事変で、景気が上向くと、電力国家管理問題が浮上した。卸売会社で供給区域を持たない大同電力は、挙げて日本発送電への設備譲渡を決断、大同電力は解散した。

昭和14年4月、日本発送電が発足すると、増田は初代総裁に迎えられた。発足した日本



大同電力から日本発送電への事業委譲契約調印

発送電は苦難の日が続いた。昭和14年は空前の渇水に見舞われ、水力設備はあっても発電できず、頼みの石炭も軍需優先で調達は思うに任せなかった。豊富な電力を標榜して設立された日本発送電であったが、電力不足を来

し、各方面から批判を受け、責任を取る形で昭和16年1月、総裁の椅子を去った。その後、請われて台湾電力社長に就任、戦局が厳しくなる昭和20年1月に辞した。

増田は福沢桃介と同年生まれであったが、戦後まで生き、昭和26年1月、83歳で没した。郷里の菩提寺満蔵寺には、彼の遺業を称えて建立された胸像が建っている。

(浅野 伸一)



増田次郎の名前を冠した満寿太橋(右上、改修済)の架かる須原発電所(関西電力提供)



増田次郎胸像(満蔵寺)